

第二話 硫黄島と硫黄島の戦い

1 硫黄島概説

(1) 概要

行政区分上は、東京都小笠原村に属し、都区部から南方に約 1,200 km に位置する。島は、東西 8 km、南北 4 km の大きさである。最高峰は標高 170m の摺鉢山。海底火山島で地熱が高く火山性ガスが至る所で噴出し、二酸化硫黄の臭いが立ち込め、島名の由来となっている。南北に小島があり、これらと硫黄列島を形成している。島は、今なお、隆起を続けており、年間約 2.5 cm もの速度（この為築港が出来ない。）であり世界的にも珍しいとされる。

硫黄島は緯度的には、台湾北部より若干南に位置し、気温は海流の関係でほぼ同緯度にある台北市よりも高く、亜熱帯海洋性気候である。

年平均気温は 24 度で、一日の気温差は最大 6～7 度、最高気温は、40 度近い日もあり、6 月中旬～10 月上旬までは 30 度を越える日が多く、一年中で一番寒い月とされている 2 月でも 12 度位である。

降水量は、夏期は短時間で多量の降水量があるスコールが多く、冬期は夏期に比べて少ない。6 月～11 月（6 ヶ月間）の降水量は、12 月～翌年 5 月の降水量の約 2 倍程度、年間降水量は、平均値で約 1,200mm で東京の降水量をやや下回る。



(2) 戦前には6つの集落と尋常小学校と神社があった。硫黄採取、サトウキビ等の栽培、近海沿岸漁業で生計を立てていた。

(3) 戦後は、昭和43年6月小笠原日本復帰まで、米国の施政下にあった。返還後は、海上自衛隊管理の航空基地が設置され、島内全域がその基地となった。海自は硫黄島航空基地隊及び航空隊硫黄島分遣隊を配置し、空自は硫黄島基地隊（中部航空方面隊隷下）、陸自は不発弾処理を担当する隊員数名を派遣している。正に陸・海・空の統合が具現化されているといつてよい。

(4) 硫黄島における自衛隊及び米軍の訓練について

滑走路は、2650m×60m、幅30mの並行誘導路が1本である。

①米空母艦載機の離着陸訓練、夜間離着陸訓練

②空自：各種実験飛行や戦闘機の移動訓練

③防大・防衛医大生、陸自学生の研修（C-1、C-130を利用）

（５） 飛行場等の整備・改修を担当する北関東防衛局の職員、建設業者鹿島建設等及び遺骨収集・帰還事業を担う厚労省の職員等が必要により立ち入りが許可されている。

（６） 通信

交通困難地に指定され郵便や宅配便は届かない。固定電話は一回線、移動体通信は衛星電話とソフトバンクのみのサービスエリアとなっている。

（７） 「硫黄島」は、「いおうとう」か「いおうじま」か？

島民及び陸軍は「いおうとう」と呼称し、海軍及び海図では「いおうじま」とされていた。米国は海図に従い「いおうじま」と表記した。終戦後米国の施政権下にあったため「いおうじま」が流布された。日本返還後、小笠原村が都に「いおうじま」と報告し公報された。為に「いおうじま」と呼ばれることが多かった。２００７年、小笠原村議会が、呼称を「いおうとう」と呼称する決議を採択した。これを受けて国土地理院、海上保安庁海洋情報部で構成される「地名等の統一に関する連絡協議会」は、同年６月「いおうとう」に統一した。

（８） 旧島民の帰島問題

一部の島民及び遺族は、政府に対して帰島を求めている。

２ 硫黄島戦史概説

（１） 日米両軍にとっての硫黄島の価値等

昭和１９年６月から８月にかけて米軍のサイパン島、テニアン島、グアム島への上陸、そして日本軍守備隊の玉砕が相次ぎ、絶対国防圏構想は崩壊して東条内閣は総辞職せざるを得なかった。

絶対国防圏の一翼を占める小笠原諸島を防衛するため第３１軍を編成し、小笠原方面最高指揮官として栗林忠道陸軍中将が補職された。同中将が指揮する部隊は、昭和１９年６月２６日には大本営直轄の小笠原兵団となり、海軍部隊を併せ指揮することとなった。

同中将は硫黄島の戦略的価値を認め、同島に司令部を置いた。米軍側も、同じく同島の価値を認め、沖縄作戦に先立ち、硫黄島攻略を決定し、デタッチメント作戦と名付けた。米軍にとっては日本本土爆撃に任ずる爆撃機の間着陸点、護衛戦闘機の基地確保、日本軍の米軍爆撃機監視・通報拠点覆滅等の作戦上の価値があった。

（２） 日本軍の作戦準備等

太平洋の島嶼防御作戦においては、当初は水際撃滅防御方式を採用していたが、米軍の

圧倒的な火力の前に、守備部隊の玉砕が相次いだ。その戦訓もあって、沿岸配備方式に変更され、ペリリュー島の作戦中川大佐指揮する部隊が、地下陣地を活用した靱強な戦闘により米軍を苦しめた。

栗林中将は、この防御方式を更に徹底させた。中将は、後方陣地及び全島の施設を地下で結ぶ全長28kmの坑道陣地を計画した。将兵のモチベーション維持や軍紀の厳正化にも邁進した。しかしながら主に手作業による地下工事は困難の連続であり、激しい肉体労働に加えて防毒マスクを着用せざるを得ない硫黄ガスや、30℃から50℃の地熱に晒されることから連続した作業は5分間しか続けられなかった。清水の入手方法が雨水程度のため、将兵は塩辛く硫黄臭のする井戸水に頼らざるを得ず、激しい下痢に悩まされた由。

中将は、常に率先陣頭・垂範し、部下と苦楽を共にした。硫黄島においてもっとも貴重なものは水であったから、栗林は「水の一滴は血の一滴」「各人は一日水筒一本で我慢すること」と訓示し、自らいつも水筒を肩にかけて歩き、決してこれ以外の水を使うことはなかったと云う。将兵は、「一掘りの土は一滴の血を守る」を合言葉に作業が続けられた。また、時間の許す限り、陣地の構築状況を自ら点検し、部下将兵を激励し、具体的な戦闘法まで直接指導した。将官の斯様な統率が、戦史に稀有な戦いを為し得たのであるう。

必死という正に極限状況下における将帥の統率の厳しさを示すエピソードも多い。不適格な幕僚や隷下部隊指揮官の職務を免ずるのは当然としても、免じた者を本邦に帰すことなく引き続き硫黄島居住を命じた。また、時には上官暴行にも該当するような事件もあったようだ。そのような厳しい状況下で軍としての一体感を保持し、上陸米軍に多大の損害を与える敢闘を為し得たのは栗林中将に負う処極めて太であった。戦後米軍から名将との称号を与えられたのも当然だったのだろう。

坑道は深い所では地下12mから15m、長さは摺鉢山の北斜面だけでも数kmに上った。地下室の大きさは、少人数用の小洞穴から、300人から400人を収容可能な複数の部屋を備えたものまで多種多様であった。出入口は近くで爆発する砲弾や爆弾の影響を最小限にするための精巧な構造を持ち、兵力がどこか1つの穴に閉じ込められるのを防ぐために複数の出入口と相互の連絡通路を備えていた。また、地下室の大部分に硫黄ガスが発生したため、換気には細心の注意が払われた。

第一線は相互支援可能な陣地で構築され、至る所にトーチカが設置された。第二線陣地も計画準備された。結果的には坑道陣地が18km程度完成した段階で、米軍を迎え撃つこととなった。

防御戦術の変更は海軍側が千鳥飛行場確保に固執したため、陸軍側が一部譲歩するという事案があった。何時の時代も統合は難しい。

日本軍総兵力 陸軍13,586名、海軍7,347名、その他航空隊等

(3) 中将の戦闘方針等「敢闘ノの誓」

- ・一 我等ハ全力ヲ奮テ本島ヲ守リ抜カン
- ・一 我等ハ爆薬ヲ抱イテ敵戦車ニブツカリ之ヲ粉碎セン
- ・一 我等ハ挺進敵中ニ斬込ミ敵ヲ皆殺シニセン
- ・一 我等ハ一發必中ノ射撃ニ依ツテ敵ヲ打仆サン
- ・一 我等ハ敵十人ヲ斃サザレバ死ストモ死セズ
- ・一 我等ハ最後ノ一人トナルモ「ゲリラ」ニ依ツテ敵ヲ悩マサン

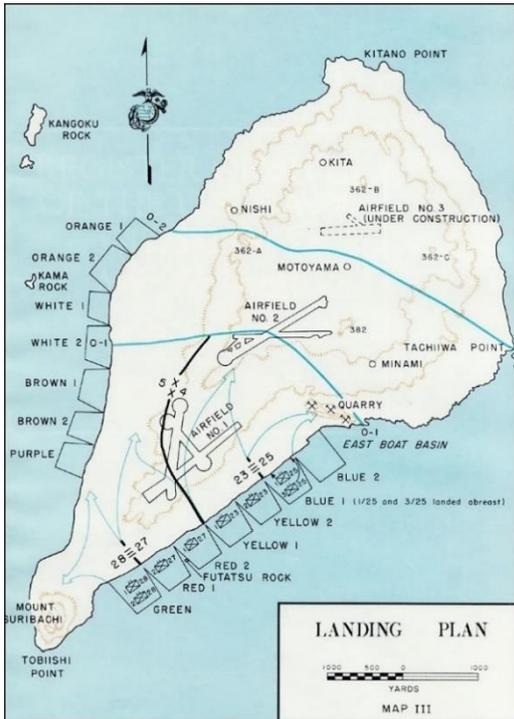
(4) 米軍の作戦

昭和19年10月ターナー海軍中将を指揮官とする硫黄島派遣軍に作戦準備が発令された。上陸支援に任ずる4個任務部隊、上陸部隊としては3個海兵師団を基幹とする第5水陸両用軍団であった。

作戦は2個海兵師団を並列し硫黄島南海岸に強襲上陸、橋頭保の迅速な確保と、第5海兵師団には南の摺鉢山、第4海兵師団には右側面の元山周辺の速やかな占領が示された。

(下の作戦図参照)

米軍は上陸準備として74日間のB-24による爆撃、上陸前の艦砲射撃等を3日間実施した後、昭和20年2月16日(日本時間)攻撃を開始した。19日艦砲射撃、爆撃等の後9時上陸を開始した。散発的な射撃を受けるも海兵隊は円滑に上陸した。10時、満を持していた日本軍の集中攻撃が開始され、米海兵連隊の損害率が25%、戦車の半数が撃破されるという状況であった。翌日、千鳥飛行場は海兵隊に制圧されたが、摺鉢山正面では一進一退の激闘が続き、予備の海兵師団が投入され、23日午前10時過ぎに摺鉢山頂上を奪取された。この時の写真がピューリッツァー賞を受賞した「硫黄島の星条旗」である。



24日から26日にかけて、海兵隊は馬乗り攻撃を繰り返しながら元山飛行場への攻撃前進をしたが、その速度は遅々たるものであった。が、遂に26日夕刻元山飛行場は陥落した。元山正面の日本軍陣地も次第に蚕食され戦闘限界に近付きつつあった。

3月7日、栗林中将は最後の戦訓電報を打電し、3月14日軍旗奉焼、16日大本営への決別電報を打電し、組織的戦闘は終結。嗚呼、玉砕！

(5) 戦闘結果

硫黄島の戦いで、日本軍は守備兵力 20,933 名のうち 20,129 名（軍属 82 名を含む）が戦死した。捕虜は、終戦までに併せて 1,023 名であった。

米軍は、戦死 6,821 名、戦傷 21,865 名の約 2 万 9 千の損害を受けた。

硫黄島の戦いは、太平洋における島嶼防衛戦において、アメリカ軍地上部隊の損害が日本軍の損害を上回った稀有な戦闘であったと同時に、アメリカが第二次大戦で最も人的損害を被った戦闘の一つとなった。

（6） 日本本土爆撃での硫黄島の役割

硫黄島の奪取によってアメリカ軍はマリアナから出撃して日本本土空襲を行っていた B-29 を支援するための理想的なポジションを手に入れた。その中で硫黄島陥落後の変化は護衛戦闘機の直援を受けた B-29 爆撃機による昼間の中高度以下の爆撃が可能となったことと、不時着飛行場が確保できたことである。

（第二話 了）